

### 第三百十話 『「憎し」に固執し、国忘る』愚の骨頂

大東亜戦争における陸海軍の確執は、正に肉親憎悪に近いものがある。それが故に日本が敗戦したのだとは言えないかも知れないが、敗戦責任の一端は陸海軍の不仲にあるのだろうとの思いを強くする。仲の悪さを象徴するような話題は今までのメモランダムで幾つか指摘してきたが、装備に関して紹介する。藤井非三四著「なぜ陸海軍は共に戦えなかったのか」（光人社 NF 文庫）の 200 p～202 p を参考に略記したい。

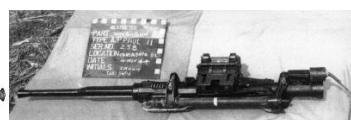
#### 1 航空機搭載用 20 mm機関砲

和製「メッサー」とも呼ばれる三式戦闘機「飛燕」に、陸軍は初めて 20 mm機関砲を搭載することとした。選定されたのはモーゼルのマーク 151 機関砲だった。独から 800 丁を輸入・搭載し、1943 年 8 月から同銃を搭載した飛燕が登場した。然しながら、ライセンス生産は、日本の冶金技術と工作技術では無理なことが判明した。

一方、海軍は零戦にも搭載されて実績も高いエリコン社製の機関砲を有し、その生産技術も習得済みであった。

常識的に考えれば、海軍零戦に搭載されて実績もある機関砲を陸軍航空機にも搭載すれば良い筈だが、何故かそうならないところに日本陸海軍の仲の悪さがある。

海軍に頭を下げて譲って貰うのが嫌なのだ。海軍は陸軍が頭を下げてきても簡単には認めなかっただろう。天下国家を考えての大所高所からの判断ができない。悲しいことだ。



#### 2 弾薬の相互運用性の欠如

航空機用の機関銃は、陸海軍共に口径 7.7 mm のビッカース系である。当然弾薬も共通であると考えるのが当然だが、陸軍が何故か薬莖の形状を変えたために陸海軍の共用性は失われたと云う。

#### 3 陸・海航空機搭載機関銃の口径の不統一

日本陸・海軍航空機搭載機関銃・砲を見れば信じがたい事実がある。

陸軍：12.7 mm のブローニング系

海軍：13.2 mm のラインメタル系

何とも馬鹿げている。

以上を見ても明らかであるが、陸海軍の確執は兎戯にも等しい、日米の国力差がある上にこのような陸海軍の確執があるのではその格差は拡大するばかりだ。

陸海軍の対立は、相手に対する憎悪が増幅するばかりで、理性の入り込む余地がないようにすら見える。

尚、同書には、陸海軍の協同連携がうまく為された事例も掲載されているが、夫々のトップ同士が旧知であり腹藏なく話し合えた場合に限られているようだ。下僚のレベルでは対立が先鋭化するが、流石にトップともなると大局的判断ができるのだ。

陸海軍の確執を解消するために、我が国の将校養成が列国に例のない合同士官学校となったのは正しく慧眼だったと云うべきだろう。

陸海軍の確執を考えると悲しくなるのは小生のみか？

(F)